



一貫コース通信

チョット世俗からは離れますが

地球温暖化問題は今や単なる課題の域を越えてしまった感が在る。思うに、各種のマスコミの論ではなく、ついに、私にも実感の伴うプロブレムになった。嬉しい事に、二酸化炭素が地球温暖化の一因である事を、客観的に論証した功績で真鍋叔郎博士が2021年度のノーベル物理学賞に輝いた。真鍋博士が1960年代の今とは比較できないレベルのコンピューターでシミュレーションしたモデルが、実態と合致する事で、二酸化炭素が温暖化の原因で在る事が証明されたのである。これも、今から数えてざっと50年も前の事である。

現在、身の回りの情報も含め危機感を感じさせるモノが後を絶たない。例えば、この所の梅雨や秋霖は必ずと言って良い程豪雨を齎し、尊い人命を犠牲にする。また、食生活に直結している、獲れる筈のサンマや鮭が従来海域では水揚げされない。その原因も海水温の上昇なのだと言う。これ等は、もはやそしらぬ顔で受け流す事は出来ないと、私は自覚する。

私が大学生だった頃の記憶だが、既に科学雑誌には温暖化の危機は載っていた。しかし、当時はそれ以外の公害問題や大気汚染に伴う喘息問題等、直接命に係わる問題が切実な為、温暖化問題等は霞んで見えた。(生産効率が第一で、当然自然保護など見向きもされなかった。)

実は、地球環境の重要性は、温暖化問題だけに限らない。包括的にはSDGsで提唱されているが、如何に一人ひとりが肌感覚でこの事を実感出来るかが鍵(Key)なのだと思う。話題は飛躍するが、地球環境が如何に人類と深く関わるかを示唆的に書いた作家に、立花隆先生が居る。それが書かれているのは、このコース通信で触れた名著『宇宙からの帰還』の中である。内容は12名の宇宙飛行士が辿ったその後(末路)をルポルタージュした著書である。彼等の宇宙での体験は、当然地上での既存の経験を越えてしまう。それぞれの経験(人類史上、初めての体験)を伝える時に、経験値の無い人(一般人を含む)に如何に伝えるか…と言う段で行き詰まってしまうのだ。そして、あるモノは宣教師の道を選び、また、あるモノは…と言う風に、結果的に栄光の路線から道を違える事実を綴っている(日本人初の宇宙飛行士、秋山氏も又その一人)。しかし、異口同音に語るのは、神々しいまでに美しい地球の姿に感動し、詰まる所、宇宙服の中は全く地球の環境で在る事実の吐露である。つまり、ヒト(地球内生命)がヒトとして生きて行くうえで、如何にモガコウが、結局のところ地球環境外で生存する事など出来ない宿命を。

人間の弱さと罪深さは紙一重だ。また、先人の教訓を生かせず(生かさず)愚かさを繰り返すのも、また、ヒトである。なぜ、学ばなければならないのかの解の一つは、この事(ヒトで在るが故に、避けにくい事)を出来る限り繰り返さない為にある筈だ。学ばなければ、日常はただ流れるだけで気が付けない。その光景は情報の流れにも似て、意味を決定づける主体は自分でしかない。しかし、一瞬立ち止まり、その世俗から距離を置く事が、必要なのだと考える。そうでもしないと、温暖化の事も、コロナ禍の事も、問題の本質に近づけないと思うのだ。

